

手術あり肺血栓塞栓症予防対策実施率

定義

肺塞栓症リスクの高い患者に対する、予防対策の実施割合です。

算式

分子: 危険因子手術を行い、かつ抗凝固療法薬を使用したまたは管理料を算定した患者数

分母: 危険因子手術を行った患者数

当院の値(調査期間)

R1年度	87.25 % (年間)
H30年度	88.42 % (年間)
H29年度	89.10 % (年間)
H28年度	84.56 % (年間)

項目の解説

肺血栓塞栓症は、エコノミークラス症候群ともいわれ、血のかたまり(血栓)が肺動脈に詰まり、呼吸困難や胸痛を引き起こし、死に至ることもある疾患です。長期臥床や下肢または骨盤部の手術後に発症することが多く、発生リスクに応じて、早期離床や弾性ストッキングの着用などの適切な予防が重要になります。当該指標は、術後肺血栓塞栓症予防対策の実施状況を評価するものです。